

教員養成大学で地域生活に根ざした学びを習得していくことの 今日的意義と授業実践

Significance and Educational Practice on Community-based Learning at A University for Training Teachers

鎌倉 博 *Hiroshi Kamakura*
(人間発達学部)

【要旨】

「小学校教員養成大学」の今日果たす役割として、現場において必要な知識と技能とともに、「学校と地域の関係」を自らコーディネートできる実践力を獲得させていくことが大切だと考える。その根拠はどこにあるのか、「学校と地域の関係」をコーディネートできる教員になるために大学教育においてどのような授業体験・社会参加体験が必要であるのかを明らかにしていきたい。

【キーワード】

地域の中の大学 地域生活に根ざす学び 18歳選挙法改正 アクティブ・ラーニング アクション・ラーニング

1. 「地域の中にある教員養成大学として発揮したい力」の考察

(1) 「地域の中の大学」としての名古屋芸術大学（以下「名芸大」）への期待

北名古屋市役所総務部市民活動推進課の樋口由訓氏から北名古屋市の町づくりの現状について聞き取る機会があった。そのとき提示された資料¹⁾に、市民総勢40名で楽しく夢のある町づくりについて語り合った記録がまとめられていた。その中で興味深いのが、参加者から出された282個の「今後の北名古屋を考えていくアイデアのネタ」から、参加者が1人3つ選んで投票した結果である。それによれば、第2位で「名芸大との交流（芸大祭と地域の祭のコラボレーション）」、同4位で「芸大生の演奏で歌につなげる（フラッシュモブ）」がランクインされている。美術・デザイン学部生の作品が徳重地域の通りを飾っていること、音楽学部生が地域に開いたコンサートを行っていること、人間発達学部生が保育園・児童館の夏祭りで活躍していることなどで、名芸大が大学地域において一定認知されてきていることが窺える。しかし地域住民は、町の活性のために「地域の中の大学」としての名芸大に更なる期待を寄せているのである。

そのことは、加藤聡一准教授と共同運営している3年生の「子どもの生活と教育ゼミ」に、北名古屋市商工会議所青年部の沖村剛部長・高橋雅俊副部長を招いて懇談する機会でも、更にはっきりした。両氏は、高齢化が着実に進行している北名古屋市に若者が増えること、その若者の活力とアイデアが町づくりに寄せられることを大いに願っていると話した。そして、両氏が学生に向けて話す以上の時間を割いて、学生から「どんな町だったらよいか」のアイデアを聞き取ろうとしていた。

(2) 深刻な社会問題・政治課題と若者の存在

大学は学校教育法において以下のように定義されている。

「第83条 大学は、學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

2 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」

元々大学には、学んだことが「広く社会に提供」されることを期待されている。実際本学卒業生も、作品展やコンサートなどの様々な発表の場や、幼稚園・保育園・小学校・福祉などの現場で活躍している。

しかし、少子・高齢化、大都市集中・地方過疎化、後継者不足などの問題は、非常に深刻になっている。生まれながらの土地で暮らす地域住民は、肌身をもってその深刻さを感じている。だからこそ子ども・若者に地域に位置づいてほしいという願いが根強い。大学もこの地域住民の願いをしっかりと受け止めていく必要があると考える。

(3) 地域の中にある教員養成大学として発揮したい力

本学には、若者が多数集っていることに加え、教員免許・保育士資格取得を目指す学生が通っている。その立場で、先の地域住民の願いにいかに応え得るか、次に考えてみたい。

第1は、教育や福祉の分野で、学んだ知識や技能を実際に地域で発揮することである。彼らの力をもってして、子どもたちが生き生きと暮らし学ぶならば、それ自体で赴任先の地域に活気を生み出すことになる。

第2に、在学期間中に大学地域で若い活力とアイデアが発揮できるようにしていくことである。人間発達学部1年生は市内の保育園・児童館の夏祭り運営補助の要請に応じている。自由工房・自然とくらしを楽しむ会などのサークルが、自ら地域と繋がって、町の行事を応援している。大学もこうした地域からの要請や期待に敏感になり、しっかり応えて学生に紹介し、学生が地域住民と協働活動していく機会を増やしたい。

第3に、教員養成大学としてもつ大学人としての知識を町づくりでも発揮していくことである。すでに本学部教員が、様々な地域の教育・保育・障害者・子育て支援などの取り組みの要請に応じてきている。公開講座、ニコニコワークショップなども地域に広く公開している。支援要請を待つだけでなく、大学で展開している学びを積極的に地域に開いていく視点を、さらに重視していく必要がある。

2. 本稿のねらいと研究のアプローチ

1の(3)において、「地域の中にある教員養成大学として発揮したい力」を3点示した。しかし、このことはすでに本学においても、どの大学においても意識されて取り組まれていることである。今回本稿で試みたいのは、4点目に加えたい「地域の中にある教員養成

大学として発揮したい力」の考察である。その内容とは、「教育の内容と方法において地域生活に根ざした教育を展開し、地域が人間として豊かに暮らせる場に改善させていく力を子どもたちに据えていく。そのための知識と技能を教育系学部生が獲得していくこと」である。以下、「地域の中にある教員養成大学として発揮したい力」の4点目を挙げる意図を4つのアプローチから考察することから始め、今年度大学で始めた初歩的取組みを紹介しながらこれから必要となる実践課題について論考していきたい。

3. 「地域生活に根ざした学び」を展開していくことの意義の考察

(1) 考察1 戦後教育の中で大きな焦点となり続けている「地域生活に根ざした学び」²⁾

戦時教育にあっては、教育の内容も方法も国家による画一統制が徹底された。国定教科書の使用を必須とし、教授と訓育によって子ども・国民を教化・感化させながら、国家に奉仕できる人材に育てることを学校教育の何よりの目標としていた。

しかし70年前に連合国軍に対して降伏を宣言したことで、その教育のあり方が大きく見直されることになった。その力の1つは、GHQならびにその後来日する米国教育使節団による「極端ナル国家主義」の排除の方針に基づく教育改革の力であった。しかし他方、国家統制の教育から解放されたことで、本来持っていた力を大いに発揮し始めた、日本の教師・研究者たちによる教育改革の力が大きかったことも見逃してはならない。前者は、日本の「民主化」と、その後負わされる新たな国際戦略上の位置づけを狙ってのトップダウンでの教育改革であった。対して後者は、食糧・物資の欠乏、荒廃した町からの立て直しを進め得る力の獲得を学習の大きなねらいとした、下からの教育改革であった。地域復興と絡ませた教育計画「〇〇プラン」づくりが全国各地で試みられた。戦時の国家主義教育に屈し不幸と悲惨を招いてしまった反省から興ったこの教育運動は、地域現実に目を向け教育課程自主編成権を発揮した教育づくりの第1高揚期を形作った。

しかしながら、この新たな教育づくりの動きは長くは続かなかった。その背景には、1つ目には、米ソ冷戦構造で全世界が震撼させられる中、実質的支配国であった米国が対日政策を露骨にしていたことがあった。2つ目には、その米国に対して日本政府が従属し、新たな画一化を始めたことがあった。いずれも上からの抑圧が働いた。しかし3つ目に、地域生活に目を向けて教育課程の自主編成権を発揮していた民間教育研究活動の側の教育理論上の弱さがあった。民間研究団体内で巻き起こった批判の主な論点は、日本社会の現実をどう認識するか、教育における科学をどうとらえてどう位置付けるか、とりわけ戦後新たに誕生した「社会科」をどう構想するか、にあった。米国の占領政策とそれに従属する日本政府の動きは日本の民主化を裏切るものであるとの見方が、民間研究団体内部に高まってきたために起こった批判だった。こうして、教育課程自主編成権を発揮しようとしていた教師たちは、地域生活改善につながる学びよりも、教育の力をもって民主国家の実現を目指すことの方に主眼を置くようになっていった。

その後日本は形式上独立国家としての地位を回復した。しかし、依然として国民生活は困窮し、町の復興も生産活動もままならなかった。政府は外国からの財政支援を大きく工業・インフラ整備に傾斜して注ぎ込んだ。こうして日本は一気に「高度経済成長」期を迎えた。農業大国だった日本はあっという間に工業大国に変貌していった。

しかし、その急速な社会変貌は、他方で公害、都市の過密と地域の過疎化、富裕層と貧困層の二極化の問題などを生み出した。こうした事態に直面した日本の自覚的な教師たちは、改めて地域生活に目を向け始めた。すなわち、地域で起こっている様々な問題は、その地域固有に起こっている問題であるように見えながら、実際は国の政策のあり様が各地域で表れている。だから、国の動向と地域動向とは密接不可分である。そうとらえるようになったのだ。とりわけ苦しむ子どもたちを目の前にして、公害病問題を扱わないわけにはいかないと、切り込む教師たちが各地で現れた。人間の健康と命をかけた裁判闘争やマスコミ報道によって、国民全体の環境への関心も高まり、公害問題は学習事項として『学習指導要領』にも明記されるようになった。

地域を見つめた教育実践は公害問題にとどまらなかった。熊本県の中学教師吉田定俊は、度重なる水害被害の実態を子どもたちと調査しながら、その水害が城下町とは対岸の貧しい町でばかりで起こることに疑問を感じ、水害が治水対策のあり方で起こっているのではないかと突き止めていく学習を展開した³⁾。茨城県の小学校教師鈴木正気は、過疎化と水質汚染で廃れゆく漁港を子どもたちと見つめながら、漁民としての誇りを持ち続けた漁師と出会わせながら、どうやって漁港を再興できるか考え合わせた⁴⁾。地域現実の中で起こっている出来事を直視したこうした数々の取り組みが各地で展開されることで、固有の地域を見つめる学習の大切さが広く認識されるようになった。全国各地で副読本として地域を見つめる教材が誕生するのもこの時期である。日本の意識的な教師たちが地域現実に目を向け、教育課程自主編成権を發揮した教育づくりの第2高揚期と言えるだろう。

ところがこの第2高揚期も、その後の国の政策によって徐々に切り崩されてきた。革新自治体の相次ぐ誕生やそれを可能にした革新運動の高揚に危機感を持った政府・財界からの熾烈な切り崩しが始まった。それによって、国民の意識は大きく変えられた。その機を利用して政府は次々と合理化・効率化を推し進めるようになった。教育の中では「学力重視」の思想を根付かせていった。いかに教科書に書かれている事柄を効率よく確実に身につけさせるか、その結果として立身出世をはかれる子に育てられるか、そこにこそ教育の価値があるかのような幻想が大きく広まった。競争教育が過熱し、受験産業が大きく根を張るきっかけにもなった。その煽りで、地域生活に目を向けた学習はどんどん視野の外に置かれていった。

ところが今、その「地域」が新たな視点で再び注目されている。大きく動き出したのは、1995年の「阪神・淡路大震災」と2011年に起こった「東日本大震災」によってである。未曾有の自然の破壊力が特定の地域に集中し、一瞬にして多くの人々が住まいを失

い、家族や仲間を失った人も少なくない。そうした中で、自主的に支援活動に入る「ボランティア」が注目され、国はこうした動きを「郷土を愛する心」「地域に貢献できる人材」育成の動きにつなげようとしている。

一方で、実際に被災した側から地域現実を見つめ、そこからの自らの復興のうねりをつくりだそうという動きも生まれている。宮城県の徳水博志は、住まいにおいても赴任先においても地元だった町が津波によって壊滅的な被害を受けた。その地元校を統合によって再興させる県の動きに対して住民の1人、地元校の教員の1人として立ち上がった。徳水は、「学校なくして地域の復興なし」「地域なくして学校の復興なし」ととらえて、バラバラになっていた子どもたちが再び集まれる学校にしようと教職員や被災住民に呼びかけた。徳水は、町の人とつながる総合学習を中心とした学習を展開することで、被災住民の学校への期待の声を高め、学校統廃校を食い止めている⁵⁾。福島原発事故の影響で避難を余儀なくされたままの福島県双葉郡では、「被災体験がハンデとして固定化されて」はならない⁶⁾として8町村が立ち上がり、子どもたちに生きる希望と「故郷の町」を大事にしてほしいと願い、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」を打ち立てた。現在、福島大学も支援して、総合的な学習の時間を活用した「ふるさと創造学」を豊かに展開している⁶⁾。地域現実に目を向け教育課程自主編成権を発揮した教育づくりが、ここでもまた進められているが、第2期までのような「高揚期」とまでなりきれていない状況がある。

しかし、戦後教育の歩みを概括してみると、「地域生活に根ざす教育」は、様々な政治的動きの中で切られたとしてもトカゲの尻尾のように再びその必要が復活してくる。すなわち、「地域生活に根ざす学び」は明らかに常に必要な教育課題であり、教育の大原則の1つだと考える。

(2) 考察2 小学校現場での経験からの考察⁷⁾

私が23年間勤務していた、東京都世田谷区にある私立学校での23年を振り返っていても、「地域生活に根ざす学び」は重要な位置を占めていた。私が3年生を担当した際の社会科と総合的な学習の時間（勤務校では「総合学習」としている）で取り組んだ地域探検学習から築かれた「学校と地域の関係」で考察してみたい。

4月、社会科を初めて学ぶ3年生と、屋上から町を眺め、大まかな特徴をつかんだ後の授業時間に、方位磁針と町の地図をもって、みんなで探検活動に出かけた。学校の北方面には商店街が続き、駅を通り越すとまた違った商店街が伸びている。しかし駅向こうの商店街は、子どもたちには未知の世界だった。1軒1軒興味深そうに眺めては、ゆっくりと歩を進め学校に帰った。その教室で「調べてみたい店」を聞いたならば、「高い煙突のある工場」と「おもちゃがいっぱい置いてあったお店」に関心が高かった。よくよく聞いてみると、それは「銭湯」であり、「駄菓子屋」を指していた。平成生まれの子どもたちには、昭和世代ではお馴染みの店は未知だった。そこでまず、授業づくりのために私が取

材と交渉に出かけた。2軒とも、厳しい経営環境の中でも、地域住民の暮らしと共同を守りたいという強い思いをもって営業していることを痛感させられた。ぜひ子どもたちにも聞かせたいと思った。熱心に通うことで関係が確立し、子どもたち全員で訪問。入浴や買い物体験、インタビューする機会を得ることができた。

そうした学習がきっかけで、「店の移り変わり」が子どもたちの関心になった。そこで、見慣れている駅までの商店街の1軒1軒を子どもたちと調べた後に、詳細地図上の3年前の店とを比べさせてみた。なんと、たった3年間で4分の1のお店が入れ替わったり廃業していたりしていたことが分かった。

こうした地域調査活動の様子が商店街で話題になった。そうして、大型店舗に負けずに個人商店を並べて頑張っている商店街と、学校が学びで繋がるようになった。子どもたちはこの商店街に親近感を感じ、学校に用事で来た親を誘って店を訪ねるようになった。地域の個人商店に関心を寄せ始めてくれたことに、商店街は「元気が出る」と喜んだ。今度は「町を明るくしたい」と、商店街の大フラッグのペインティング、花いっぱい運動のお手伝い、商店街祭りでの踊り出演依頼などを続々と学校に持ちかけてくるようになった。

もう1つ印象的だったのは、農家とのつながりだった。学校南側地域は閑静な住宅街だ。しかし、その住宅街をつぶさに歩くと営農畑が点在していた。そこで、今度は地域農業を営む農家とつながった学習をつくろうと取材を始めた。その際、露地販売されていた、実の部分だけで1メートル越えの長い大根に出合った。世田谷特産の「大蔵大根」だと後々分かった。実はその当時「幻の大根」「腰抜かし大根」と呼ばれていたのだ。なぜならば、長すぎて簡単に育てられないしなかなか抜けもしない。その上、大きすぎて消費者も買わない。だから「幻」になりつつあったのだ。それでも、都会の住宅街の中で、地の野菜にこだわって情熱を注いでいる人たちもいたのだ。そこで、こうした農家の生き様に触れさせたいと思った。

当時は1軒で20本ほどしか植えていなかった。だから、子どもたちに引き抜き体験させてもらうにも、6班×2クラスの12本が限界だった。しかし、次年度以降3年生を担当する教師が毎年この大根に目を向けていってくれたおかげで、今では70人ほどの子どもたちが毎年1人1本抜けるほどに、栽培規模が拡大された。バスや電車で通う子どもたちが、毎年家まで持ち帰る間、道や電車・バスの中で話題にされ、「歩く広告塔」になっていたからだ。こうして大蔵大根の学習が毎年の3年生の親子の楽しみになるとともに、農家も都会の中で耕作し、地の野菜にこだわることへのやりがいを持てるようになったと喜んだ。

「子どもたちが深く見つめることで地域が元気になる」「学校も地域を題材に学べることで学ぶ喜びや楽しさが増す」というように、地域と学校は双方向で好循環を生み出せる関係にあると、私は現場経験から感じている。ぜひこうした双方向の好循環がコーディネートできることを、教師の大きな喜びにしていけたならと考えている。

(3) 考察3 コミュニティ・スクール化の流れ

地域と学校の関係は文科省も大いに関心を寄せている。平成27年度、文科省は一般向けのパンフレットを作成して、各地域でのコミュニティ・スクール化を加速させようとしている⁸⁾。コミュニティ・スクールの推進は、いじめ・非行・問題行動の予防・早期発見につながるとともに、地域の教育力の活用による子育て支援・教職員の多忙化の解消・学校教育活動の充実などでメリットがあると考えているようだ。

三重県松阪市立第四小学校においては、絵本の読み聞かせ、登下校の見守り、希望する児童の土曜学校、授業補助などで、地域ボランティアが1年間で延べ3500人以上の地域住民が関わっているのだという。そのために、地域からの支援の申し出の受け入れや手配を担当するコミュニティ・スクール・コーディネーターの教員も配置しているという⁹⁾。

北名古屋市では市内にある10の全ての学校に「学校運営協議会」を置いてコミュニティ・スクール化を積極的に推進している。市立五条小学校では、住民・教職員代表合わせて14人で学校運営協議会を構成し、地域連携・学習支援・環境安全・子育て支援・広報の5部門を置いて、年4回の会合をもっているという。協議会長が取材に応じ「地域が良くなれば学校が良くなり、さらに地域が良くなるという好循環が続けば」と発言している記事が紹介されていた⁹⁾。

学校運営評議会の委員は、学校や地域の実情を踏まえて教育委員会で任命することになっている。教育委員会がどのように「学校や地域の実態を踏まえて」判断するかが大きな関心事にならざるを得ないが、構成メンバーの意識によっては、学校教育・家庭の子ども支援・地域の安全やよりよい環境づくりなどが進んでいく可能性も秘めている。

文科省のパンフレットにある「成果」で注目したいのは「教職員の意識改革」である。とかく学校はこれまで「閉鎖的」と言われてきていた。「幼小保連携」「小中連携」等の動きと合わせて、「1学校」という見方から「地域の中の学校」という見方を、教職員が意識していくことは大事な教育視点になっていくことだろう。

(4) 考察4 18歳選挙法の成立を受けて

2015年7月、参議院において「18歳選挙法」が可決・成立した。そこには様々な思惑が働いているようであるが、私は子どもの権利保障を拡充するという世界の必然的な流れの中でとらえていく必要があると考えている。

そこで今、政治教育のあり方が大きな焦点になってきている。そもそも学校教育における政治教育は、政権の維持や転換をねらいとする扇動や洗脳とは全く異質である。教育基本法には

「第14条 良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない。

2 法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教

育その他政治的活動をしてはならない。」

と明記されている。

では、「良識ある公民として必要な政治的教養」とはどのような内容を言うのであろうか。私は、以下の普遍として確立されてきている社会の理念とシステムのことだと考えている。

- ①人間の共同生活成立以降の歴史過程において生み出されてきた集団合議制
- ②主権者認識の変遷における基本的人権の保障と国民主権の意味
- ③日本国憲法成立までの歴史過程とそこに込められている願い
- ④集団合議をより確かに進める三権分立・二院制の意味
- ⑤様々な願いと意思表示、議会・議員・政党のあり方
- ⑥住民要求を自ら実現させていく主権者としての政治への関わり

普遍として確立されてきている社会の理念とシステムは、現段階における最高の水準としての普遍・真理に基づくものであり、その内容の判断は専門家集団・世界の社会認識に基づかなくてはならないのは当然のことである。

また、その政治教育においては、子どもたちの発達が考慮されなくてはならないのと同時に、子ども自身が主体になった学びを保障していかななくてはならない。すなわち、必要な事柄は教授されるとしても、子ども自身が調査・研究し、集団討議等していくことをしっかりと保障し、子ども自身がその内容を自ら獲得していくようにしていかななくてはならない。そうなれば、特定の政党支持を押し付ける授業などあり得ないことになる。

政治教育の最終的なねらいは、子どもたちが現実生活を常に見つめ、主権者として将来の社会に展望を持ち、その実現のために考え、選択・判断し、行動していく力を身につけていくことにあると考える。文科省が最近発行した高校生向け副教材を見ると、投票行為を体験する「模擬投票」や、政策についての「ディベート」などを実践例として紹介している¹⁰⁾。しかし、第三者のフィルターを通した情報をもとにした中でのこうした学習活動では、その第三者の意図による世論誘導の中での議論や判断になりかねない。これでは、客観的な選択や判断にならないし、「教育の中立」にはならない。大切なのは、子どもたち自身が現実生活を見つめることであり、そのための「地域生活に根ざす学び」の徹底なのである。地域生活には、今まで見てきたように社会や国のあり方が色濃く投影されている。その地域生活の現状を深く直視できる力を育ててこそ、誰に影響されることなく、「自分」を主体にした正しい選択と判断をしていくことができるはずである。

そうして、その「自分」が主体となって考え、選択・判断し、発信していくことで、願いが生活改善につながっていく姿に出合ったり、自ら体験していくことを繰り返したりしたならば、子どもたちはもっと政治を身近に感じ、自らの力で政治に働きかけていくことに喜びを見出し、意欲的になっていくことだろう。よって、「地域生活を深く見つめる教育力」を発揮できる教師をいかに育てるか、この点からも教育系大学教員の今日的新たな

使命があると考える。

4. 「地域」に着目にした大学における授業・体験活動の試み

(1) 「地域生活に根ざす学び」の視点での生活科と総合的な学習

ここで注目したいのが、「地域生活に根ざす学び」がそもそも位置づいている、生活科と総合的な学習の時間である。生活科においては、その学習内容において、「地域で生活したり働いたりしている人々」「様々な場所、公共物」「地域の出来事」「地域の自然」などが明記されている。総合的な学習においても「地域の人々の暮らし」（小学校のみ）「地域や学校の特徴に応じた課題についての学習活動」（小中学校のみ）「日常生活や社会とのかかわりを重視」「地域の教材や学習環境の積極的な活用」が明記されている。このように、実生活を営んでいる地域そのものを、生活科と総合的な学習では重視するようになってきている。

実際に全国では、田んぼのある地域での稲作りや、漁村における魚加工体験など、地域の特徴を生かしての工夫した学習活動が行われている。しかし、私の知るところ、それらは地域で営まれている特色ある産業に触れる一過性の体験で終わってしまっている。そのため「楽しかった」「大変な仕事だと思った」という、他人事の感想に終始してしまっているケースが多い。そうした体験学習を体験だけで終わらせず、もっと奥深く地域生活している人々の喜びや苦悩、願いや要求に迫る調査・研究にしていかななくてはならない。

その意味で、生活科や総合的な学習における学習指導として、いかに地域を題材化し、実際に地域に足を踏み出して楽しみながら、深く関わることで見えてくる地域住民の声や思いを明らかにし、それをどうしたら改善していけるかを、子どもの発達に応じて考え進めていく力を育てていく。そうした力をいかに獲得させていけるかを問わなくてはならない。これからの教育現場を担う教育系学生にはぜひこうした力を育成できる力を身につけてほしいと考える。

以下に紹介する内容は、私が担当した本年度前期の、1年生を中心とした「生活」と、3年生を中心とした「生活科指導法」における、「地域」を題材にした授業の概要をまとめたものである。

(2) 「生活科指導法」における地域草花観察活動

4回目の授業で行った。その前の回で、学校外で自然活動することの意義を『学習指導要領』を踏まえて確認し、さらにどういう観察の仕方をしていくのかを、各クラス（4人強×2クラス）で考えさせて出かけた。1クラスは「草花で遊ぼう」を狙いとし、もう1クラスは「1人2つの花を見つけて来よう」を狙いに選んだ。他教科と違って、学習目標を子どもたちと教師とでつくっていくことができる生活科の教科としての特色を早速発揮した。

授業日が違う2クラスだったが、幸い天気にも恵まれて予定通り実施できた。学生には

予め、表裏に記入できる観察カードを持たせた。活動場所は大学裏の田んぼ地帯。大学を出て5分ほど歩いた場所。まだ田起こしした程度で田んぼに水は入っていなかった。その田んぼと公道の境目に「雑草」が生えていた。中には、田んぼや用水と隣り合わせに建つ家の庭に植えられている草木に着目した学生もいた。正味40分の観察・記録活動であった。

炎天下で遠くまで歩くことはしたくないためであろう、スタート地点で群がるように観察する学生が多かった。しかし、お気に入りの風景や植物を見つめて田んぼのわき道を進み行く学生もいた。この田んぼ地帯は、多くの学生が利用する駅と学校との往復道ではなく、「初めて歩いた」という学生が大半だった。

学生が目にとめた草花は、名前を確認できたもので「ヒメジオン・ツツジ・ナズナ・タンポポ・シロツメグサ・カタバミ・ヘビイチゴ・レンゲ草・カンナ・オオイヌノフグリ・アオギリ」の11種類だった。名前を特定できない植物もあった。観察途中でスマートフォンを出している学生がいて、注意しようかと思ったら、植物名を特定しようと植物画像を見ていた。こういう検索機能を生かすのも、今後の学習活動充実のツールになるのであろう。

草花遊びでは、「四葉探し」、オオバコを使っての「草相撲対決」、細い葉を使っての「草笛鳴らし」、シロツメグサを使っての「草冠作り」、思い出の1枚にする「しおり作り」、植物で「占い」、ナズナの葉を使っての「デンデン太鼓鳴らし」をやっていたことが、「草花遊びカード」で分かった。

中には、ヒメジオンの花びらの数を1枚ずつ剥いでは数え進めている学生もいた。その学生は「花びらは30枚ぐらいだと思っていたけど、数えたらもっと多かった。273枚だった！」とカードに記録していた。「匂いは側溝に落ちそうだった為確認できず」とカードに書いていた学生もいた。自らの知恵を働かせて深くその植物を観察しようとした、こうした学生の姿を次回の授業では紹介し褒めた。

「学校地域」の一面にある田んぼ地帯に生えている草木花に注目し、遊びも入れながら、じっくりと見つめ、それを「観察カード」に書くことで、改めて植物に関心を向けるとともに、個々の植物の特徴を見つめる目を肥やす機会になった。しかし、そればかりではなく、改めて「学校裏地域」の土地利用としての地域の特徴とともに、植物分布における地域の特徴を一定把握するという意味において、「地域に根ざす学び」の機会になった¹¹⁾。

(3) 「生活」の授業における地域探索活動

5回目の授業で行った。その前の回で、学校外で地域探索活動することの意義を確認し、大学周辺地域の主な特徴だけ確認しておいた。当日は、往路20分までの範囲の中で歩き、そこで気になった場所やものを2つ「この町紹介カード」に書き込んで来て、終了時間までに大学に戻ってくるという予定で活動を開始した。生活科の地域探索活動においては、1つには交通安全、もう1つには一定の集団行動が大切である。学生にも同様の指導を事前にしており、最低2人以上で行動することを求めた。

「こんなところに神社があるなんてびっくりした」

「児童公園・児童遊園が意外に多かった」

1年生は通学を初めて2か月。「大学地域」を認識している範囲は、せいぜい大学と駅までの道の間だった。そのため、この地域探索活動を通して発見された場所やものが、あたかもすごいものを見つけたかのように、新鮮に報告された。炎天下の活動だったこともあり、少しの休息をとろうと立ち寄った店の味の情報交換が一番盛んだった。

6回目の授業では、全員分の「カード」を縮小コピーして配布した。それを見合いながら、「大学周辺」の東西南北の大まかな特徴をみんなで見つかった¹²⁾。

<p>〈西コース：駅方面に伸びる地域〉……………車が多くてこわい 駅からの道 線路 天然酵母のパン屋さん 無人卵販売機のあるドラッグストア 早川眼科の前の畑</p> <p>〈南コース：大学正面に広がる地域〉……………お店・家・児童公園が多い ケーキ店「シャトレゼ」 パン屋「マナの森」 お好焼店「やっちゃば」 八幡神社（氏子中） 熊之庄八幡児童公園 隠れミッキーのかわいい壁の家 クリーニング屋 弁当屋「Hotmotto」 新宮児童遊園 新宮東児童遊園 師勝坂巻郵便局 スーパー「ヨシズヤ」 ヨシズヤの一角の遊具 ヨシズヤの2階からの風景 たこ焼き屋</p> <p>〈東コース：駅と反対方面に伸びる地域〉……静かだけどみんなが集まれる所が多い 日光寺 北名古屋市東公民館 喫茶店「ポスト」 熊之庄交差点付近に畑 クリエ幼稚園 熊野神社 熊野神社の桜並木 市民プール 熊之庄保育園</p> <p>〈北コース：大学裏側に広がる地域〉……………田んぼがあって自然が残る 熊之庄北交差点 熊之庄北交差点の歩道橋 熊野中学校 田んぼ 用水（溝） 古井北児童遊園 ビアノ工房 カエル ザリガニ バッタ 野良猫 ホタルカズラ ニワセンキョウ</p>

7回目の授業では「北名古屋市立昭和日常博物館」へ行った。館内には高度経済成長期以前の貴重な生活用品がぎっしりと展示されている。地域探検学習の面白さを実感できると思って、敢えてこの施設の見学活動を取り入れた。炎天下の道を20分ほど歩かなくてはならないが、ほとんどの学生が参加した。形や大きさを変えて今もあるものもあれば、昔あって今にはないものもある。それぞれにどうやって使うのか、現代のものどう違うのか興味津々で見、「『昔のもの』紹介カード」に記入していた¹³⁾。

「公共施設」とは具体的に何を指すかと聞いた時、学生が挙げていたのは「学校」「駅」「公園」ぐらいだった。「市役所」「消防署」「警察」に至っては公共施設かどうか判断できず自信なさそうに挙げていた。「体育館」「市民プール」「図書館」「博物館」「児童館」「保健所」など生活に結びついた公共施設が身近にあるはずだが、利用したことがないようで認知されていなかった。小学校教員を目指す学生においては何とも心細い。こうした体験学習活動、アクティブ・ラーニングにおいて、いかに公共施設を身近にしておくことが大事か痛感させられた。いずれにしても、地域探索活動を通して「地域に根ざす学び」の機会がくれた。

(4) 「生活科指導法」で感じさせられた「大学地域」認識の広がり

1年生を主とした「生活」では、生活科の学習内容の面白さが体験できることを目標とする一方で、3年生を中心にした「生活科指導法」では、その生活科の様々な題材の計画と準備、活動後のまとめと発展学習の段取りがつかめることを目標としていた。そのため、「生活科指導法」では校外活動を組み入れられたのは、先の草花探索活動がやっとだった。7回目の授業で、地域探索活動を題材にした授業を始めた。その導入に、2年余大学と住まいとの往復の生活を繰り返して来た「大学地域」で、「印象に残っている場所・もの」を、グループトークで書き出させた。そうして、全体で紹介し合った。それを見て驚いた。

〈スーパー・コンビニ〉

「ヨシズヤ」「デイリーヤマザキ」「サークルK」「セブンイレブン」「西友」「バロー」

〈飲食店〉

ヨシズヤ近くのたこ焼き屋 焼肉「うしの家」 中華料理「銘軒」「平和平」 沖縄料理「島唄」 スパゲティ「五右衛門」 とんかつ「とんとんハウス」 ラーメン「如水」 お好み焼き「やっちゃば」「じゃけん」「なかちゃん」 居酒屋「八剣伝」 喫茶「時代屋」「星野珈琲」「カフェロード」「カントリロード」「じょあん」 インド料理「ブシャーン」「熊之庄食堂」 焼鳥「鳥政」「マクドナルド」「すき家」

〈食品店〉

ケーキ「シャトレゼ」「樹の花」 名芸大の裏の焼菓子店 お菓子「桃の館」 おかき「もち吉」 パン「manaの森」「ブルドッグ」 お弁当「ペントマン」「ほっともっと」 珈琲雑貨「豆や」 タピオカの店 五平餅のお店

〈雑貨・生活用品その他のお店〉

駅前の雑貨屋さん 薬「B&D」 文房具「師勝事務所」 赤ちゃん用品「西松屋」 布の店 塾「ナビ個別指導学院」「京進」 古本屋 大きなサイズの服の店 パズル「ピースステーション」 名芸大前のクリーニング&たばこ屋さん 美容室「犬も歩けば美容室」「うずらちゃん」「HOPPE」「師勝ペットサロン」「早川眼科」 接骨院 GS「ENEOS」

〈スポーツ・遊技場〉

ゴルフ場 バチンコ「東宝プラザ」「クリオコート」 トランポリン「AIR-X」 北名古屋スポーツセンター テニススクール

〈公共施設〉

師勝郵便局 交番 幼稚園「クリエ」「花の樹」 西春高校 十六銀行 碧南信用金庫

〈友達の住まい〉

「せんじ宅」「なちゃん宅」「やまし宅」「いけず宅」「ひー君ち」

〈その他〉

「当たる確率の高いルーレット付自動販売機」「チリンチリンおじさんがいる」「五条川の桜がきれい」

ご覧のように、大学生生活2か月ほどの1年生と、それよりも2年多い3年生とでは、

「地域」意識の広さが明らかに違った。3年生ともなると、「大学周辺」に足を延ばす生活のゆとりが生まれるとともに、公私の用件で「大学地域」を訪ね歩くことも格段に増えるのだろう。行動・活動範囲が広がるのに伴って「地域」意識も広がっているのだ。飲食・買い物・遊興が中心であろうが、それだけ地域との関わりを深め、地域に働きかけて暮らしてきていたのである。目的は様々として、こうして「大学地域」での行動や活動を意図して増やし、地域との関わり、地域への働きかけを増やしていくことが、学生が「地域を見つめる」、「地域生活に根ざす」機会になるのだと、実感させられた。

5. 教育系学生が「地域生活に根ざす教育」を習得していくための引き続き実践課題

(1) 地域環境・地域要求を把握するアクティブ・ラーニング

本学1年目、大学教員1年目の授業で、目指す授業には至らない。しかし、まずは「地域を見つめる」学習活動に足を踏み入れることはできた。学生たちは授業を通して「大学地域」の魅力や地域発見の面白さを体験することができた。しかし、本年度は地域発見で「地域のある程度を知った」に留まった。ここから、「地域生活に根ざす学び」を習得させていくためには、より踏み込んだ学習活動が必要である。

今回の地域探索活動では、主に植物や施設、土地利用の様子を一定つかむことができた。しかし、ここで把握できた情報はある種傍観者としての立場である。地域で実際に暮らしている人々の実感として地域探索・地域調査したわけではない。そこで、次に必要となるアクティブ・ラーニングは、この地域で実際に暮らす人々の思いや願いをつかむ立場で地域探索・地域調査していくことだろう。例えば、実際に「大学地域」に住む住民として私からすれば、のどかで交わる機会も多い町の良さの一方で、駅を往復するバスの発着便が少ない点と、汚水が用水に垂れ流され衛生的にもよくない上に蚊に悩まされている点では不快も感じている。地域住民からは、公共料金の引き下げを望む声、病院をつなぐバス便を求める声も、私の耳には届いてきている。この町の良さや不便さは何かと言った「地域環境調査」「地域要求調査」に今後挑んでいくことが必要と考えている。

(2) 地域で協働する人々との出会いを作り、その思いに迫るアクティブ・ラーニング

地域要求に迫るアクティブ・ラーニングを進めていくに当たっては、「学習指導要領」にも「具体的な活動や体験を行うに当たっては、身近な幼児や高齢者、障害のある児童生徒などの様々な人々と触れ合うことができるようにすること」とあるように、地域に暮らす人々との出会いを創り出すことが大切である。

この半年間の「大学地域」との関わりの中でも、様々な個人・団体が交流と協働を目的として動いていることが分かった。市内で障害者に働く場所を保障するあかつき共同作業所の「秋祭り」に有志学生とボランティア参加した際、様々な個人や団体が、店や舞台で障害者のみなさんを励ましていた。その舞台発表していた団体の演技を見て、そこに集っ

たそれぞれの団体の存在の意味を1つ1つ感じさせられた。こうして市民交流を促し協働しようとする様々な個人や団体と、子どもたち・教育系大学の学生たちがつながっていくことが大切だと考える。

しかし、その出会いが一過性であってはならない。その団体が「どのような思いで生まれ続けられているのか」「なぜ障害者のみなさんを励ますお祭りに参加しようと考えたのか」など、出会う人の価値を深く探るアクティブ・ラーニングが必要である。その思いをつかむためのアクティブ・ラーニングとして、インタビュー・取材する力の育成が必要である。1(1)で紹介したゲストをゼミに迎えて懇談する機会に、なかなか発言が出て来なかった。関心の深さと思ったことをどんどん話していける力において、彼らを育て切れていないことを感じた。ここには、それまでの全ての授業の質と意図的体験の弱さが出ていると言わざるを得ない。アクティブ・ラーニングの1つの手法として、「授業で発言する」「地域に出て取材やインタビューをする」ことをもっと意図的に進めたい。

(3) 地域との協働作業を生み出すアクティブ・ラーニング

市民活動推進課からは様々な催し物への学生のお誘いが来ている。当然紹介し誘いもするが、なかなか参加に結びついていない。

「出会い」に留まらず、「協働作業・協働計画」を進めていく学習活動の展開が必要である。このことを学習課題にするには、小学生の低学年には無理がある。しかし、小学校高学年にもなってくると、問題解決能力を一層発揮し高めてきているので可能である。その点で、小学校教員を目指す学生には、そうした力を自ら発揮する体験をくぐっておくことが必要である。この力は、学校運営協議会に関わり、地域住民とともに「より良い学校・づくり・よりよい地域づくり」をコーディネートできる教員の育成にもつながる。

地域住民から名芸大の学生に寄せられている声を真摯に受け止めたり、敏感に受け止めたりした上で、自分達に何ができるかを考え、1つでも2つでも形にしていけるようにしていきたい。そこでの達成感や喜びが、子どもへの指導につながっていく。

なお、「地域の協働」と言うときに、大学側で全員の参加を求めて割り振って参加させる場合がある。本学では例えばそれも「夏祭りボランティア」と称している。しかし、本来ボランティアは自主自発の精神で参加するものである。よって、1年生全員に割りふって「夏祭り」運営の補助に当たらせるのは、「施設実習」「介護実習」同様、「夏祭り体験実習」と呼ぶべきである。

(4) 「地域を見つめ地域と協働する」アクティブ・ラーニングから「地域生活改善で協働する」アクション・ラーニングへ

「地域生活に根ざす学び」の更なる目標は、「地域を見つめ地域と協働する」アクティブ・ラーニングから、実際に「地域生活改善で協働する」アクション・ラーニングへと進

めていくことである。

地域住民との協働や生活環境・要求環境調査を通して、地域の人々がより暮らしやすい町にしていくための願いや具体的な要望・要求に出合うことであろう。小学校教員を目指す学生に最終的に求めていきたいのは、こうした地域住民の願いや具体的な要望・要求に耳を傾け、住民がそれをどう筋道立てて取り組みや運動として実現しようとしているかに目を向けていくことである。まさに生活実感に基づく政治参加の姿に注目していくことである。

18歳選挙法改正で、政治を子どもたちにより身近なものにしていかなくてはならない。しかし、小学生にいきなり国政問題に触れさせていくには無理がある。しかし、地域生活における生活実感として地域住民が願っていることや要望・要求している事柄は、同じ生活空間で過ごしている身として、小学生が理解するのには左程困難はない。そこで、その願いや要望・要求を筋道立てて粘り強く改善させていこうとして、どう働きかけていけばよいのかを見せていく必要がある。願いや要望を口にするだけではなく、力強く働きかけて要求していく、あるいは創造していく地域住民の姿に触れていくことは、たくましく生きることへの希望を持たせるとともに、政治を身近に感じさせ、政治参加に意欲的な子どもに育てていくことになるだろう。こうした学びは、アクティブ・ラーニングをアクション・ラーニングへ、子どもの学びを高めていくことにもなるだろう。

(5) 大学教員としての研究・実践課題

現代の教育に特に求められている「生きる力」を、子どもにも学生にも育てていくためには、以上見てきたように、地域との関わりをつくり、深めながら、地域住民の願いや要望・要求をつかみ、それを協働して改善していったという喜びを体験させておくことが大切である。このことは、小学校教育全体においても、教員を目指す学生自身の社会観・人生観を磨くことにおいても、大きな意義を持つと考えられる。

そのためにも、その力の基礎を培っていける教科としての生活科と、さらにその力を発展させて発揮していける総合的な学習の時間の内容と方法を豊かにしていくことが必要である。そのための授業実践研究とその指導法研究を進めていかなくてはならない。この点での大学教員としての自分の研究と授業力量を高めていきたい。

また、これらの学習を深めていくには、より「開かれた大学」であることが重要である。様々な地域情報・地域要請が続々と大学に伝えられ、受入可能な条件があれば、どんどん小学校教員を目指す学生に紹介していきたい。そうして、学生と一緒にその協働の意義を深め、主体的に参加していけるように導いていける大学教員でありたい。このことは学生にとっても、地域にとっても有益なばかりではなく、名古屋芸術大学と言う「地域の中の学校」としての存在意義を確固としたものにしていくことにもつながるであろう。

参考文献・資料

- 1) 2014年10月18日熊之庄協働クラブが主催（北名古屋市協力）した「熊カフェまちづくりサロン」の様子を北名古屋市総務部市民活動推進課がまとめた資料による。「熊之庄」は名古屋芸術大学東キャンパスがある地域。
- 2) 教育史を概説した文では主に以下を参考文献とした。
 - ・森川輝紀著『教養の教育学』三元社 2015年
 - ・大田堯編著『戦後日本教育史』岩波書店 1978年
 - ・日本生活教育連盟編『日本の生活教育50年』学文社 1998年
 - ・川合章『生活教育の100年』星林社 2000年
 - ・船山謙次『続・戦後日本教育論争史』東洋館出版社 1980年12版
- 3) 丸木政臣『丸木政臣教育著作選集 第2巻 歴史教育論』澤田出版 2007年 pp. 140-162 で、日本生活教育連盟発行『カリキュラム』1953年12月号所収の吉田定俊の実践記録を紹介している。その論文を主に参考にした。
- 4) 鈴木正気『川口港から外港へ』草土文化 1978年
- 5) 徳水博志「地域振興と学校教育との新たな連携をめざして」『生活教育』生活ジャーナル 2015年10月号 pp. 60-70
- 6) 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会 広報誌『ふたばの教育』1号から3号 2014年・2015年
- 7) 拙著『きらめく小学生』合同出版 2013年 pp. 90-124
- 8) 文部科学省 一般向けパンフレット『コミュニティ・スクール 地域とともにある学校づくりのために』2015年
- 9) とともに『中日新聞』2015年9月21日記事「コミュニティ・スクール 目指す子ども像を共有」
- 10) 文部科学省 高校生向け副教材『私たちが拓く日本の未来』2015年
- 11) 「生活科指導法」授業通信 「SS 通信」NO. 4と別刷り「2015年度生活科指導法 草花図鑑」2015年
- 12) 「生活」授業通信 「S 通信」NO. 5と別刷り「名芸大まわりの地域探検集」2015年
- 13) 「生活」授業通信 「S 通信」別刷り「北名古屋市昭和日常博物館で見てきた『昔のもの・風景』図鑑」2015年
- 14) 「生活科指導法」授業通信 「SS 通信」NO. 4 2015年